

アメリカには足かけ7年住んだが、毎年イースターの季節になると必ず『十戒』が主要テレビ局で放映されるのにはいささか辟易した。往年の名作を家庭の宗教教育に使ってもらいたいのだろうが、年頃の子どもたちは、遅い男性が半裸で登場するこの手の映画を「メイル・ニップル・ムービー」と呼んでまったく相手にしなかった。

アメリカの独立を旧世界からの「出エジプト」とみなす救済者国家観は、ピューリタニズムに由来する。だが著者によると、冷戦下に撮られたこの映画には反共教育という別の目的もあったという。

なるほど。だからモーセ役のチャールトン・ヘストンはことさらにアメリカ英語で話し、悪役のユル・プリンナーは東欧共産圏訛りの英語で話すのか。他にも、『ベン・ハー』で戦車を駆る主人公は再建されたばかりのイスラエルの国

論理と隠喩に差す政治の影

アデル・ラインハルト著

旗の色（青と白）をまどっているなど、ハリウッドには深く政治の影が差している。

他にも本書は、恋愛もの『プリティ・ウーマン』、コメディ『トゥルーマン・ショー』、SF『マトリックス』、ギャング物語『ゴッドファーザー』、アニメ『ライオン・キング』、西部劇『シェン』、さらにはホラー映画から牢

獄映画まで、あらゆるジャンルに聖書的な論理と隠喩が活用されていることを詳細に解き明かしてくる。ハリウッドの想像力の源泉は聖書なのである。

考えてみると、聖書は嫉妬、不倫、殺人といった映画作りの題材を提供する高度な総合エンタテインメント誌である。たとえば若い女性がじっとこちらを見つめてリ

ングをかじる時、あるいは誰かが「人を漁る」「弟の番人」と表現する時、そこに「本歌取り」のような仕掛けを読み取るのは、映画ファンならずとも愉しいだろう。

ハリウッドという「卑猥の要塞」を跪かせるために、アメリカにも「映倫」があり、不倫を魅力的に描くことや不健全な欲情を喚起することが禁じられていた、という歴史も面白い。

カナダ人でユダヤ教徒で女性である著者の目は、隠れた差別も見逃さない。反ユダヤ主義で親イスラエル、という奇妙なアメリカの立ち位置は、昨今の中東政策にもそのまま反映されている。



原題=BIBLE AND CINEMA
(栗原詩子訳、みすず書房・4800円)
▼著者はカナダの聖書学者。オタワ大古典宗教学研究科教授。同国王立協会会員。

《評》国際基督教大学副学長
森本 あんり